

日英語における道具動詞の形成について

——フレーム意味論と自己中心性の観点から——

岡田 祐輝

筑波大学

【要旨】 英語において道具動詞の形成 (例: *knife_v the man*) は非常に生産的だが、日本語においてこれらの動詞形成は基本的にできない (例: *ナイフ (す)る)。フレーム意味論 (Fillmore 1982 他) の観点から、当該語形成にはモノと場面の関係づけが必須だとした上で、本稿はこの生産性の差を両言語の自己中心性 (Hirose 2000 他) に基づく符号化の違いに起因させる。詳しくは、私的自己中心の日本語はこの関係づけを聞き手との関係を考慮して義務的に符号化するのに対し、公的自己中心の英語の話者は、この符号化をせざるも「ある場面に対してモノをどのように使用するのか」という語用論的知識 (off-stage 情報 (Boas 2003)) まで想起することができることを主張する。さらに、散見する日本語道具動詞 (例: 包丁する, ホッチキスする) が、(i) 話し手と聞き手の特定の関係に基づくレジスター特化型と (ii) 聞き手との親密度をあげる語用論的戦略としての私的表現とに原理的に分類できることを示す*。

キーワード: フレーム意味論, 私的自己・公的自己, 道具動詞, off-stage 情報, 語用論

1. はじめに

道具や手段を表す名詞 (以下, 道具名詞) を親名詞¹とした動詞形成のうち, 語形変化を伴わずにある品詞の語を異なる品詞の語として用いる転換プロセスは, 英語において非常に生産的である (Clark and Clark 1979: 776 他)。この生産性には, 「親名詞指示対象を道具として用いて何らかの行為を行う」という意味の道具動詞 (例: *mop_v the floor*, *helicopter_v*) を形成する接辞が英語において体系的に欠如している (Nagano 2008: 24–26) という語彙・形態的要因の他に, 「モノをどのように使用するのか」という知識はヒトの肉体的な経験に根差している」という Baeskow (2021:

* 本論文の執筆にあたり, 貴重なご意見とご助言をいただいた金谷優先生, 納谷亮平先生に心より感謝申し上げます。特に第2節の議論と課題提起については, 納谷先生との研究交流に着想を得ており, ここに記して深く感謝申し上げます。また, 査読の先生方には, 細部に渡って有用なご指摘・ご助言をいただき, そのおかげで本稿は内容・構成・表現のすべての面で改善されました。心より感謝申し上げます。言うまでもなく, 本論文における不備や誤りはすべて筆者に帰するものです。

¹ 本稿は, 道具動詞形成に関して語形成規則が関与しているとは考えないため, 語形成において入力志向であることを内包する「基体」という用語ではなく, Clark and Clark (1979) の “parent noun” にちなんで「親名詞」という, よりニュートラルな用語を用いる。

16) が指摘するような認知的要因も関与している。実際, Baeskow は, その使用に特別な知識が要る道具名詞 (例: *oscillograph, periscope*) だけではなく, Rosch (1973) が「基本レベルカテゴリー」と呼ぶ, 一般的にどのように使用されるかが分かる道具を指示対象とする道具名詞 (例: *hammer, comb*) を親名詞とした事例を多く観察している。このような認知的観点からすると, 道具動詞形成は通言語的に見ても, ある程度は生産的であるという予測が成り立つが, 日本語においては長谷部・神谷 (2022: 51) が (1) の例で指摘するように, あまり生産的でないことが分かる。

- (1) * {ナイフ／鉛筆／鍋／針／金槌／自転車／電子レンジ／フォーク／バター／ゼロックス} (す) る

長谷部・神谷は, このような日英語の道具動詞形成における生産性の差異に関して, 以下のように主張する。まず, 当該語形成は親名詞が持つクオリア構造 (Pustejovsky 1995) 内の「目的クオリア」の情報が利用される語形成であるとした上で, 英語の場合は意味解釈や文生成において, クオリア構造に記述された「目的クオリア」を含む語用論的情報を利用する事が出来るのに対し, 日本語の場合はそのような情報を利用する事が出来ないという影山 (2005: 97-98) の提案に基づき, 日本語において (1) が示すように, 道具名詞の動詞化が許されないのは「目的クオリア」の情報を利用する語形成が日本語では生産的でないためと主張している。一方, 長谷部・神谷は, 特定の文脈が用意されれば, 本来認められないはずの道具動詞が例外的に認められる事例 (例: ホッチキスする, 包丁する) の存在も観察しているが, これらの事例に対しては一貫した説明を与えていない。

本稿では, 道具動詞の形成に関して, (i) なぜ日英語で語用論的情報を利用できるかどうかにおいて差が出るのか, また, (ii) 日本語において, 特定の文脈でのみ例外的に認められる道具動詞はどのように位置づけられるのか, という問いに答える。分析の前提として, どのような知識が道具動詞の生成・解釈に使用されるかについて, 本稿ではクオリア構造のように言語外の知識が語自体に直接記載されていると考えるのではなく, 我々の実世界における日常生活の背景知識や経験, すなわちフレーム意味論 (Fillmore 1982 他) におけるフレーム知識に照らし合わせることで道具動詞の意味は理解されると考える。このような理論的前提のもと, 日英語における自己中心性 (無標の直示的中心の位置づけ) の違い (Hirose 2000 他), すなわち, 英語は伝達の主体である「公的自己」が無標の直示的中心であるのに対し, 日本語は思考や意識の主体である「私的自己」に無標の直示的中心を置いているという違いから, 上記の問いに対して一貫した説明を与える。まず, 公的自己中心の英語では, 話し手と聞き手の情報共有に重点が置かれるため, 聞き手は話し手と同じ視点から親名詞と結びつくフレームを想起することができ, それにより道具動詞形成に必要な親名詞指示対象に関わる off-stage 情報 (文の解釈には直接関与しないが, 文脈によって具現するような, いわば「舞台裏」に隠された語用論的知識 (Boas 2003)) にまでアクセスできると主張する。一方, 私的自己中心の日本

語では、話し手と聞き手の間の情報共有が必ずしも前提とされず、親名詞が喚起しうるフレームに対して、聞き手は話し手が想像しているほど「深い」アクセスが基本的にはできないので、そのモノの用途を言語的に明示しなければ、道具動詞形成は語用論的な理由から基本的に認められないと論じる。このように考えることで、日本語において散見する道具動詞について、(i) 話し手が一方的に「モノ」と「場面」(フレーム)を関係づけた結果生じる、一種の「私的表現」(伝達を意図せず、話者の認識を単に表出する表現)と(ii) 特定の社会文化的背景知識を共有した特定の話し手と聞き手の間だけで用いられる一種の隠語(“secret language”(Tsujimura and Davis 2018: 379, Akita 2014 も参照))として位置づけられるものがある、と一貫した説明を与えることができる。

次節は、日英語における道具名詞を親名詞とした動詞形成と、長谷部・神谷(2022)を初めとしたクオリアに基づく分析を概観し、日本語の例外的道具動詞の特性について観察する。3節は、フレーム意味論と、その名詞の動詞化分析への応用、および日英語の自己中心性の違いについて概観する。4節は、3節での観察に基づき日英語の道具動詞形成に関わる仮説を立て、その観点から日英語それぞれに特有の道具動詞形成メカニズムに説明を与える。5節は、両言語間の道具動詞形成レベルの違いについて論じる。6節はまとめである。

2. 背景

2.1. 日英語における道具動詞形成

1節で、英語において道具動詞を形成する手段としては、転換プロセスが非常に生産的であることを確認したが、日本語において名詞から動詞を作る手段としては、接尾辞 *-r* を付加することで「Nる」(例: 鍋る, ググる)という形を形成するものと(Tsujimura and Davis 2011 など)、補助動詞「する」と複合化することで「Nする」(例: お茶する, 包丁する)を形成するものがある(影山 1993, Kageyama 1999 など)。しかしながら、「る」形動詞の意味に関しては、対話者間で共有している知識に基づき、様々な意味になるため、必ずしも道具動詞を形成する訳ではない²。例えば、「スタバる」(<スターバックス)を例にとると、親名詞指示対象である「スターバックス」と何らかの関係があればどのような意味でも表すことができ、当該動詞がどのような状況で使用され、発話時にどのような情報が対話者間で共有されているかによって、表す意味が変わってくる。まず直観的に思い浮かぶ意味は、「スターバックスにコーヒーを買いに行く」ことや、あるいは「スターバックスでコーヒーを飲む」ことであるが、Tsujimura and Davis (2018: 378)によると、特に若い世代の人にとっては、スターバックスでくつろぐことであり、注文するものはコーヒーでな

²「る」形動詞は本動詞と活用のされ方やイントネーションが異なったり、接尾辞 *-r* を付加することのできる要素に音韻的制約があったりなど、意味的制約の他に形態的制約を持つが、本稿ではこの点に関して特に議論しない。「る」形動詞の詳しい意味的制約や形態的制約については、Tsujimura and Davis (2011)などを参照。

くともジュースやマフィンであってよい。つまり、どのような意味を「る」形動詞が表すかは、どのような状況下で当該動詞が使用されるかによるものであり、この点で Tsujimura and Davis (2018: 377-380) は「る」形動詞の意味はその語用論的な性質と不可分であるとしている³。そのため、本稿では「る」形動詞について、道具動詞形成可否との関連では特に議論せず、「Nする」の形に焦点を絞って議論する。

「する」との複合化は、動詞と同じように独自の項構造を有した動詞的名詞 (“Verbal Noun (VN)” (Kageyama 1977 他) (例：散歩，寄付，発生)) がインプットになるとされている。先行研究においては、この複合動詞を語彙部門で派生されたものとする語彙的アプローチ (Miyagawa 1987 など) と、別々の構成素として生起した VN と「する」が、統語的に編入された結果だとする統語的アプローチ (Kageyama 1977 など) が存在する。両アプローチの共通点は単一の複合語が形成されるという前提だが、「VN する」という形式は、(2) に示すように、一見語ではなく句であるような性質を示すことがある⁴。

(2) 散歩さえする。／微動だにしない。 (Kageyama 1999: 314)

(2) では、VN と「する」の間に焦点不変化詞「さえ／だに」が差し込まれているため、語の一部分だけに統語的な規則を適応したり、語の内部に統語的な要素を挿入したりすることはできないとする語彙的緊密性 (“Lexical Integrity” (Anderson 1992)) の原理に従うと、当該複合語は「句」と考えられるかもしれない。しかしながら、影山 (1993: 261) は以下のような語彙的緊密性のテストをあげ、「VN する」は「語」としての性質を有しているとする。

(3) a. 夏休みには、兄は海外に旅行し、弟は富士山に登山した。
→ *兄は海外に旅行、弟は富士山に登山した。

³ 動詞「スタバる」の親名詞は「スターバックス」という特定の企業を指す固有名詞であるため、道具動詞の親名詞としてはふさわしくないと考えられるかも知れないが、ある行為の道具や手段となりうる「モノ」を指す名詞が親名詞であった場合でも、「道具を使って何かする」という道具動詞の意味を表す訳ではない。以下の実例を考えてみよう。

- (i) a. 家にある食材と調味料で鍋るのが得意技。
(<https://park.ajinomoto.co.jp/special/naberu/>, 下線追加)
b. 一人暮らしの大学生に仲間と鍋るように送りました。
(https://review.rakuten.co.jp/item/1/220872_10000007/1.1/mf2/, 下線追加)

長谷部・神谷 (2022) では「鍋」は動詞として用いることが難しいとされているが (本文 (1) を参照)、インターネットで実例を探すと、少ないながらも (i) に示すような例がある程度は見つかることが分かる。しかしながら、意味的には単に「鍋を使って料理する」という道具動詞としての意味ではなく、「ある特定の材料を鍋料理にする」ことや「複数人で鍋を囲む」ことを意味し、特殊なニュアンスで使用されていることが分かる。この点からも、日本語において道具動詞形成は非生産的であるとする長谷部・神谷 (2022) の観察を支持するとともに、「る」形動詞の意味的分析において、語用論的な性質を考慮に入れなければならないとする Tsujimura and Davis (2018) の主張にも同調する。

⁴ 当該複合動詞が語彙的緊密性を欠くその他の統語的文脈は Matsumoto (1996) などを参照。

b. 司法試験に兄は落第し、弟は合格した。

→ *兄は落第、弟は合格した。

(3) では等位構造にある「VNする」について、前半の「VNし」を「VN」だけにすることはできないということが示されており、「VNする」は形態的には語として認定されている。また、影山 (1993: 261) は (2) の「さえ」の介在について、「夫は夜勤さえ、(そして) 妻は内職さえした。」という例をあげ、前半部の「する」の削除ができると指摘し、(3) のような等位構造における削除を証拠に、「VNする」はむしろ「語」であると結論づけている。つまり、「VNする」の形態上のステータスは、完全なる一語ではないがそれに近い緊密性を持つ点で、通常のVPよりも統語的な結びつきが強く、一つの語彙的な単位として機能しているということである。Booij (2010: Ch.4) はこのような事実から、当該の複合動詞形成を「擬似名詞編入」(“quasi-noun incorporation”) と呼んでいる。

「する」との複合化と道具動詞の形成に関し、長谷部・神谷 (2022: 54) は、何らかの動作を行うための道具や手段を指示対象に持つ名詞がインプットになる場合は、独自の項構造を持たないため、「する」との複合化が許されないとしている。その代わり、(4) の下線部のように、独自の項構造を持った具体的な動作や変化などを表す動詞を使用し、どのような行為がその道具名詞を使って行われるかを指定しなければならないと指摘する。

(4) ナイフで切る、鉛筆で書く、鍋で煮る、針で縫う、金槌で叩く、自転車で移動する、電子レンジで温める、フォークで刺す、バターを塗る、ゼロックスでコピーする
(長谷部・神谷 2022: 54)

一方、由本・影山 (2011: 181-183) は「する」の前に単純なモノ名詞 (道具名詞) がくる例をあげているが、その場合、モノ名詞ではなく単純事象名詞の解釈になると指摘している⁵。例えば、「お茶する」の意味は「お茶かコーヒーなどを飲んで休憩する」であり、「休憩」のような動作的な意味が加わると述べている。一方、長谷部・神谷は特定の文脈下では道具名詞の動詞化が認められる事も観察しており、これは2.3節で見ることにする。

英語における道具動詞形成については、(1)、(4) で使用されている日本語名詞に対応する (5a) にあげた名詞が全て道具動詞の意味で使用することができることから分かるように、非常に生産性の高い語形成のひとつである。実際、Clark and Clark (1979: 776-779) でも名詞転換動詞の中で道具動詞の用例が最も多くあげられている。

⁵ おひとりの査読者から「{|ゼロックス/リコピー| する」といった事例をご指摘いただいた。これらの事例も同様に、事象名詞としての解釈を得ている (「ゼロックス/リコピー」が発売され始めた当初、複写機としては圧倒的シェアを持っていたため、メトニミー的に「コピー」の代名詞として使用されてきた) 可能性が考えられる。

- (5) a. knife, pencil, pot, pan, needle, hammer, bike, microwave, fork, butter, Xerox
 a'. She knifed him in the back. / She hammered the metal flat. / She buttered the bread.

(長谷部・神谷 2022: 52)

次節では、この日英語の道具動詞形成における生産性の差異を、クオリア構造の観点から長谷部・神谷 (2022) がどのように説明しているのかを概観する。

2.2. 名詞のクオリア構造を使った分析

名詞の動詞化に関して、どのような種類の名詞からどのような意味の動詞が作られるかという問題は、先行研究において大きな関心を集めてきた。例えば、Kiparsky (1997: 482) は道具動詞の意味に関して「ある行為があるモノにちなんで名前を付けられた時、その行為にはそのモノの典型的な用途が関わる (If an action is named after a thing, it involves a canonical use of the thing.)」と一般化している (和訳は著者による)。このように、親名詞にまつわる百科事典的知識は、道具動詞 (とその他の名詞派生動詞) 形成の重要なファクターであるが、その実世界の知識をどのように理論化するかはどのような理論を取るかによって変わる⁶。

世界知識の重要性については、名詞転換動詞の草分けの研究となった Clark and Clark (1979) でも言及されており、以下のような提案がなされている。彼らは、名詞転換動詞の表す意味には、人が具象物をどのように範疇化しているのかについての知識 (“Generic Theories” (Clark and Clark 1979: 789)) が反映されていると考え、(i) どのような物理的特徴を持つか (physical characteristic), (ii) どのようにできたか (ontogeny), (iii) どのように使用されるか/何のために存在するか (potential role) というモノの3つの側面を見て範疇化するという。例えば、Clark and Clarkによると、我々は「レンガ」を (i) 「赤茶っぽい色をした子供の靴箱ほどの形と大きさ」、(ii) 「粘土から焼いて作られており、ホームセンターなどに置かれている」、(iii) 「壁などを作成するときに使用される」といった知識から定義している訳である。そして、これらの側面の内、他の類似カテゴリから当該カテゴリを区別し、かつ、当該カテゴリの中心メンバーに当てはまる (つまり、そのモノをもっともよく説明してくれる) 側面を「顕著な特徴」 (“Predominant Feature” (Clark and Clark 1979: 789)) と呼び、この特徴がアウトプットとなる名詞転換動詞の意味に反映されると考える。例えば、名詞 brick を *brick the ice cream* のように動詞として使用した際は、様々な語用論的要因によってその解釈は変わってくるものの、「レンガ」の顕著な特徴であるそのサイズや形といった物理的特徴に基づいて「アイスクリームをレンガのような形と大きさにする」という意味になる。

このような親名詞指示対象自体に結びつく分類基準上の百科事典的知識を、当該

⁶ 親名詞と結びつく背景知識についての詳細な議論は Nakajima (2020) や中野 (2022) を参照。

動詞が形成される際に使用される知識として設定する考え方は、Pustejovsky (1995) の生成語彙意味論におけるクオリア構造 (Qualia Structure) を用いた分析 (Baeskow 2006, 由本・影山 2011 など) と軌を一にしている。(6) は小野 (2005: 24) による、クオリア構造において、語の指示物に対して仮定されている 4 つの知識 (側面) である。

- (6) a. 構成クオリア (Constitutive Qualia) : 物体とそれを構成する部分の関係
 b. 形式クオリア (Formal Qualia) : 物体を他の物体から識別する関係
 c. 目的クオリア (Telic Qualia) : 物体の目的と機能
 d. 主体クオリア (Agentive Qualia) : 物体の起源や発生に関する要因

名詞転換動詞は多様な意味を表すことで知られているが、このように親名詞指示対象についての情報を語彙意味の一部としてクオリアで表示することで、親名詞に結びつく 4 つのクオリアの内 1 つが派生される動詞に継承されると考えることができ、体系的に名詞転換動詞の意味を分析することができる。例えば、(7a, b) の名詞転換動詞 *powder* は親名詞 *powder* に記載されているクオリアを継承しているが、それぞれ別のクオリアを参照している。

- (7) a. She powdered her face.
 b. “Matcha” is Japanese powdered green tea.

(由本・影山 2011: 197, 下線追加)

本稿の考察対象である道具動詞が使用された (7a) は、親名詞の「目的クオリア」を参照することで、*powder* (粉おしろい) 本来の用途である「化粧」が引き継がれ、「おしろいをぬる」という意味になる。一方、(7b) は *powder* の「形式クオリア」の情報を参照することで、「粉」としての見た目上の特徴が引き継がれ、「粉状にする」という意味になる。

したがって、クオリア構造を用いた場合、道具動詞形成は親名詞指示対象の典型的な用途についての情報が指定された「目的クオリア」内の情報を利用する語形成であると言える。同様に、(5a) の名詞についても、目的クオリア内には (8) のような情報が書き込まれており、これらの名詞が動詞になると、それぞれ「ナイフで何かを切る、刺す」「鍋で何か料理する」「自転車で移動する」という意味を表すようになる。

- (8) knife : 何かを切る, 刺す 例 : knife the man
 pot, pan : 何かを料理する 例 : pot the meat
 bike : 移動する 例 : bike to the store

(長谷部・神谷 2022: 52, 例を追加)

このように仮定した上で、1 節で見た日英語における道具動詞形成の生産性の差異に関して、長谷部・神谷 (2022) は影山 (2005: 97-98) の以下のような提案に従っ

て説明を与えている。影山は(9)に示す通り、4つのクオリアのうち、形式クオリアと構成クオリアには文法構造に直結するような言語的情報が、目的クオリアと主体クオリアには語用論的情報が含まれているという点で大きく二つにまとめられると考え、意味解釈や文生成をする際に、英語はこの言語的情報の壁を越えて、語用論的情報を自由に利用できるのに対し、日本語はこのような操作がほとんど機能しないと提案した。

(9) クオリア構造 (影山 2005: 98, 一部改変)

	言語的情報 (形式クオリア・構成クオリア)	語用論的情報 (目的クオリア・主体クオリア)
a. 英語:	○	○
b. 日本語:	○	? ×

両言語間でクオリア内の利用できる情報が異なるという影山の提案を踏まえ、長谷部・神谷はこの違いが語形成にも反映された結果、日本語において道具名詞の動詞化があまり生産的でないと主張している。

2.3. 日本語における道具動詞

ここまで、英語とは異なり、日本語においては道具名詞の動詞化は生産的になり得ないことを見てきたが、全く観察されない訳ではなく、特別な環境下では「する」との複合化により道具動詞が形成されることがある。以下では、どのような文脈下で日本語においても道具動詞が認められるのか、また、どのような機能的側面を持っているのかを見ていく。

長谷部・神谷(2022: 55-58)は以下のような例をあげ、本来なら目的クオリアの語用論的情報を利用することができない日本語でも、特定の文脈では「する」との複合化による道具動詞形成が認められることがあると指摘する。

- (10) a. 肉に塩こしょうする。
 b. 髪を {シャンプー／リンス} する。
- (11) a. 薩摩芋を木取り、薄く包丁し流水に晒す。
 b. 上司は部下に「明日の会議で使う資料、全部、ホッチキスしておいて」と頼んだ。

(10a)では調理の手段を表す表現が、(10b)では髪を洗う用途に特化した洗髪剤がそれぞれ「する」との複合化により道具動詞化されている。(11a)は「包丁」が道具動詞化されているが、この例は日本料理の調理手順を職人が説明する際のものである。(11c)も同じように、本来であれば「ホッチキス」は「する」との複合化が認められない(*机の上の2枚のメモをホッチキスした(長谷部・神谷 2022: 56))が、会議の準備のために資料をホッチキスでとめる必要があるという前提を聞き手

と話し手が共有している文脈であれば認められることを示している。長谷部・神谷はこれらの例が認められる理由として、特定の親名詞指示対象が特定の「イベントスキーマのデフォルト値」に含まれる場合、その名詞の語用論的情報を利用し、当該の語形成が可能になるとしている。「イベントスキーマ」とは山梨(1995: 234-235)によると「外部世界の事態、状況を把握していくスキーマ」であり、「デフォルト値」とはその事象を構成する典型的な値のことであるという。例えば、(11c)では「会議の準備」という事象を表すイベントスキーマが話し手と聞き手で共有されており、その値に「書類」や「ホッチキス」が含まれるため、「ホッチキス」の目的クオリアに含まれる「紙をとめる」という語用論的情報が利用できるという具合である。しかしながら、次節で述べるように、「イベントスキーマ」と「クオリア」が理論的に整合するかどうかに関しては議論が必要であり、一貫した説明がなされているとは言い難い。

次に、長谷部・神谷では述べられていない日本語道具動詞が持つ機能的な側面について述べる。まず、(4)のように、親名詞指示対象を使用してどのような行為を行うかを明示的に言語化した場合と、道具動詞一語で表した場合とはどのような違いがあるのかを確認しておきたい。例えば、ゼミの発表を控えた学生が教員に対して次のいずれかを発話したとしよう。

- (12) a. (?) 「今日のレジユメはホッチキスしてあります。」
 b. 「今日のレジユメはホッチキスで留めてあります。」

(12a, b)の対比で分かることは、道具動詞一語で表した(12a)の方があらたまりの度合いが低く、学生が教員に対して発話するという場面にはあまりそぐわないということである((?)は調査した日本語母語話者5名のうち、3名は容認できないという結果を示す)。実際、筆者のインフォーマント調査では、「ホッチキスする」は(使うとしても)比較的親密な関係の教員に対して、あるいは友達との会話などでしか言わないという意見もあり、聞き手に対して碎けた印象を与える効果があると考えられる。つまり、誰に対して発話することができるかに一定の語用論的あるいは社会言語的な制約があるということである。

この制約は幼児の発話などからも裏付けられる。例えば、(13a, b)のように、幼児の発話においては「ボールする」のような大人が使わない複合語形成が見られる。

- (13) a. 「そうへいくんまだボールする！」
 b. 「今日は、ボールしなかったね。」っと言ってくれるお友達もいて、3歳児さんも前回のレッスンの事をしっかり覚えてくれました。(http://www.rhythmkun.jp/%E5%B1%B1%EF%A8%91%E5%85%88%E7%94%9F%E3%81%AE%E3%83%96%E3%83%AD%E3%82%B0/267.html, 下線追加)

(13a)はボール遊びに熱中していた5歳児(「そうへいくん」は自身のことを指す)が、親にそろそろ帰ろうかと言われた時の発話、(13b)はあるお遊戯会の終わり

に、前回の会のボールを使った遊びのことを覚えていた3歳児が先生に対して言った発話である。このような道具動詞の発話が特に幼児に見られるのは、幼児の場合、上記の制約を受けないためであるが、その理由として、幼児は自身が経験したことや思ったことをうまく観念化し、場をわきまえて他者に伝えるという能力に乏しい (Kanetani 2022a: 281 参照) ためだと考えられる。

以上、2節全体の議論を踏まえ、以降で議論すべき課題は (14) にまとめられる。

(14) 道具動詞の形成に関して：

- a. なぜ日英語で語用論的情報を利用できるかどうかにおいて差が出るのか。
- b. 日本語においても認められる道具動詞はどのように位置づけられるか。

次節以降では、これらの課題に一貫した説明を与えていく。特に、日本語と英語の語用論上の類型論的違い (Hirose 2000) に着目することで、これらの課題に一貫した説明が与えられるとともに、日本語において道具動詞形成が認められる場合や聞き手に対して碎けた印象を与える理由を原理的に説明することができると主張する。

3. 理論的枠組み

2.2節で紹介したクオリア構造に基づく説明の不備を補いつつ、道具動詞が見せる意味的柔軟性を捉えるため、3.1節ではフレーム意味論を導入する。その上で、(14a) で示したような日本語と英語の言語間差異を説明し、フレーム内のどのような情報をどこまで言語化する必要があるのかという観点から両言語を比較するための原理として、3.2節では私的自己・公的自己の区別に基づく語用論的類型論 (Hirose 2000 他) を導入する。

3.1. フレーム意味論と名詞転換動詞の分析への応用

2.2節の冒頭で、名詞転換動詞の意味的・機能的側面の分析において、当該動詞群の意味には親名詞と結びつく何らかの知識が反映され、その知識レベルをどのように仮定するかはどのような理論を取るかによって変わると述べた。本稿では Nakajima (2020) 及び中嶋 (2022) や Michaelis and Hsiao (2021) に従い、当該動詞形成に使用される背景知識を親名詞が喚起しうるフレームだと提案する。ここでは、フレーム意味論を概観したあと、その考え方を当該動詞群の分析に応用する利点を見ていくことにする。

Fillmore (1982 他) らが提唱したフレーム意味論とは、「言語表現の意味はその表現が使用される背景 (フレーム) に照らし合わされて初めて解釈される」という考え方を理念に置く、人の経験や世界知識と言語の意味理解との関連性を重視する経験的意味論である。その背景的知識、すなわちフレームとはその中のどれか一部を理解するためには全体の構造を理解しなければならないような有機的繋

がりに依拠した、場面についての知識構造である (Fillmore 1982: 111, 藤井・小原 2003: 373, 藤井・内田 2023: 10-11 など)⁷。例えば, *Hook tries to avenge himself on Peter Pan by becoming a second and better father.* と言った時の *avenge* という語は《Revenge フレーム》を喚起する (Fillmore and Baker 2010: 321-322 他)。《Revenge フレーム》には、実世界での当該フレームが具現化した状況や場面を抽象化したフレーム要素 (役割) やその要素間の関係性などが、スクリプトのような概念構造をもった形で含まれており、言語表現にはこのようなフレームやフレーム要素が具現され、理解されていると考える (以降、《 》内にはフレーム名、< >内には当該のフレームに含まれるフレーム要素を表記していく)。例えば、「復讐」という行為の理解には、誰か (<Offender>) が過去に損害 (<Offense>) を出し、その損害を被った人や団体 (<InjuredParty>) の存在があり、その被害に対して誰か (<Avenger>) が何らかの報復行為 (<Punishment>) を行う、という背景知識が必要である。そして、このフレーム知識が、例えば、*Hook <Avenger> tries to avenge himself <InjuredParty> on Peter Pan <Offender> by becoming a second and better father <Punishment>.* というふうに言語表現に具現されることで、当該発話は理解される。

本稿では、名詞転換動詞形成の際に使用される知識は、親名詞指示対象に直接結びつくような分類基準上の知識レベルではなく、親名詞と親名詞が用いられる項構造から喚起されうるフレーム知識であると考えられる。本稿で考察対象とする道具動詞の分析に関して、このような考え方を応用する利点として少なくとも以下の2点があげられる。

1つ目は、「モノ」の用途というのは、しばしば本来の用途とは別の使われ方をされるため、どのような用途で用いられるかを定めるには「場面」と結びつけることが必要な点である。例えば、2.2節で見た「レンガ」を例にとると、本来の用途は「壁や家などを建てる」ために使うことだが、場面や使用者が変われば、暴動の飛び道具でもドアストッパーとしてでも、何にでもなり得るのである。Baeskow (2006: 227-234) はクオリア構造の観点から、このような本来の用途から外れた道具動詞 ((15) の下線部 *bottle*) に対して、Pustejovsky (2003) の “imposed telic” という概念を用いて分析している。“imposed telic” とは、文脈上臨時的に、あるモノに課せられる機能のことであり、それ故、そのモノの目的クオリアには本来備わっていない機能のことである。

- (15) [...] Several people saw them down the lane isolated, and the next thing they were being stoned and bottled by people steaming up the laneway. [...]

(Baeskow 2006: 232)

bottle の本来の用途は「液体などを保存する」であるが、(15) では人に投げつけるための道具として使用され、その用途が当該動詞に符号化されている。この道具

⁷ フレームの定義について、これらの文献をご紹介いただいた査読者に感謝申し上げます。

動詞としての読みは、直前の文脈で「暴動」が起こっていることが述べられており、暴動には物が投げつけられるなどの暴力行為が伴うという世界知識から推測されたものであるため、概念表示のレベルでしか存在し得ないと Baeskow は主張している。ここで肝心なのは、このような文脈依存の解釈でも親名詞のクオリア構造から独立して生じているとは考えないところである。つまり、*bottle* にはその物理的特徴（形式クオリア）として、「投げつけることの出来るような物体である」という特性があり、それによってこの特異な解釈が可能になると考える。

しかしながら、「投げつけることができる」という親名詞指示対象自体に結びつく物理的特性だけでは説明できない言語事実を中寫 (2022) は指摘している。中寫は大規模コーパスを用いて、植物を表す名詞が転換動詞として使用された際、どのような名詞がどのような意味で使用されるかのパターンを明らかにしている。それでも「投げつける」という意味の名詞転換動詞を発見しているが、興味深い事に、この意味で発見できた植物名詞は (16) で使用されているような *tomato* だけであり、他の投げることができそうな物理的特徴を持つバナナや木の実などを表す名詞はこの意味で発見できなかったという。

- (16) See, the people I've talked about are those who have been a minority, and you've been egged and tomatoed and beaten up, and later on that which they have worked for have come to pass. (中寫 2022: 205)

このような事実から、中寫は「投げつける」という意味が生じるのは、文脈による純粋な推論によるものではなく、反対の立場を示すために対立者や権力者に対して、不満や反対意見を述べたり、物を投げつけたりするような行動をとることがあるという慣習的な知識（《抗議》フレーム (中寫 2022: 209)）が当該名詞と結びついていからだとしている。これら一連の議論は、名詞転換動詞の意味的解釈において使用される背景知識を、日々の日常生活で経験的に獲得されるようなフレームレベルの知識に設定することの妥当性を示している。

2つ目は、その生起する統語環境下で親名詞が項の位置に生起する言語表現とともに、特定の背景知識を想起させるような一種の換喩語 (metonym) として機能している点である。

- (17) a. Most cheaters will lie and *gaslight* you unless you catch them dead to rights...
b. My husband *gaslighted* me into believing we were broke.

(Michaelis and Hsiao 2021: 8, 斜体追加)

(17) の名詞転換動詞 *gaslight* は「相手をだまして気を狂わす」という意味合いで使用されている。このときの親名詞は、1944年のスリラー映画「Gaslight」の中で、主人公 Paula の夫が Paula が隠しているであろう宝石を奪うために、彼女を欺いて、彼女自身の気が狂ったと思込ませることに使用した道具を想起させるという点で換喩語のような振る舞いを見せている (Michaelis and Hsiao 2021: 8)。このような映

画のシナリオがあることで、親名詞 *gaslight* から「だます人」や「だまされる人」、「嘘の内容」といった要素（配役）が含まれた特定のシーンを思い浮かべることが可能になり、それぞれの要素を (17b) の主語 (*My husband*), 目的語 (*me*), *believe* の目的語 (*we were broke*) に割り当てることで、当該動詞は解釈されていると言える。

このように、親名詞をフレーム知識とそれが用いられる項構造に関連付ける考え方は、*milk_v the tea*「紅茶にミルクを入れる」／*milk_v the cow*「ウシの乳を搾る」や *seed_v the lawn*「芝生に種をまく」／*seed_v the grapes*「ブドウの種をとる」(Clark and Clark 1979: 793) のように目的語に生起する言語表現との関係で名詞転換動詞の意味が柔軟に変化する事実を良く捉えることができる。このような考え方は、Dirven (1999) や Baeskow (2021 他) らに代表される、名詞から動詞への転換をメトニミーの一事例、すなわち、イベントスキーマメトニミーの一事例として分析する考え方と類似している。メトニミーとは従来、あるもので現実世界において概念上、そのものと隣接関係にある他のものを喩えることを指すが、イベントスキーマメトニミーとは、あるイベントに参加する参加者（親名詞指示対象）が果たす役割が顕著である場合に、その参加者で当該イベント全体を表すメトニミーのことである (Dirven 1999: 278)。例えば、*The player headed the ball into the goal.* という発話は、「選手が頭でボールをゴールに押し込む」というイベント内で、「道具」としての役割を果たしている「頭」がそのイベントの中で顕著だと話し手に認知された結果、INSTRUMENT FOR ACTION という「モノ」と「イベント（スキーマ）」の間に結ばれるイベントスキーマメトニミーを親名詞 *head* で事例化した例だと言える (Baeskow 2021: 3)。このメトニミー分析と本稿のフレームを使った分析の違いは、具現化されるスキーマの具体性にある。イベントスキーマとは、伝統的な格役割の集まりで定義されるため（例えば、上述の ACTION スキーマは Agent, Patient, Instrument, Manner から成る (Dirven 1999: 285)), かなり抽象度の高いスキーマであるが、フレーム内のフレーム要素は格文法において規定されている役割とは異なり、特定の場面に特化した具体性の高い役割である (Fillmore et al. 2003: 240)。本稿ではイベントスキーマとフレームとの関係性については踏み込まないが、このようにアウトプットとなる動詞の意味を、親名詞指示対象自体に備わる特質に起因させるのではなく、親名詞とそれが用いられる項構造から喚起されるフレームに起因させることで、親名詞の換喩語的振る舞いを説明できることがフレーム意味論を応用するひとつの利点であると考えられる。

フレームを使った分析に対して問題となりうるのが、具現されるフレームをどのように決めるかということである。従来、動詞の場合は、語彙的にプロファイルされたフレーム要素が当該動詞によって喚起され（例：動詞 *hammer* は <hammerer> と <hammered> を喚起する (Boas 2011: 1273)), それが構文の項役割（例：他動詞構文の動作主と被動者）と融合することは対応関係の原則（“Correspondence Principle” (Goldberg 1995: 50)) によって定められているが、名詞の場合、様々なフレームに参加しうるため、*hammer* のように動詞としての読みが慣習化されていな

い限りは語彙的に特定のフレーム要素をプロファイルすることはない。本稿ではこの問題を解決すべく、Boas (2003) で提案されている「off-stage 情報」という概念を援用し、親名詞が参与するフレームを決定する。off-stage 情報とは、通常は当該の発話解釈に直接関与しない世界知識の一部のことであり、特定の文脈下で特定の視点から事態を詳述する必要がある際に言語化される情報のことである。例えば、語彙項目 *hammer* が *Kim hammered the metal* のように発話されたとき、<hammerer> と <hammered> が含まれたフレーム (“hammering frame”) が喚起されることで当該発話は解釈されるが、例えば、〈どのような道具を使って金属を叩いたか〉や〈叩いた結果どのような状態になったか〉といった実世界の詳細な情報は通常 *hammer* の解釈に関わらないが、受動的に得られた知識としてこのフレームと結びつけられている。そして、特定の文脈下でこれらの off-stage 情報を具体的に記述する必要性が出たときに言語表現に具現される。

- (18) a. ?? Ed hammered the metal safe.
 b. Ed hammered the metal flat.
 c. The door of Ed's old Dodge had a piece of metal sticking out. When getting out of the car, Ed had cut himself on the metal and had to go to the hospital to get stitches. The next day, Ed hammered the metal safe.

(Boas 2011: 1271-1272)

Boas によると、(18a, b) の対比が示すのは、*hammer* によって喚起されるフレームの中で「叩いた結果どのような状態になっているか」という情報には「安全な状態」という情報は結びついておらず、通常予測されるような「平らな状態」という情報が強く結びついているということである。一方、(18c) の例では、a に対応する文に至るまでの文脈で、〈hammer されるもの〉である *the metal* が「人にとって危険な存在」として解釈される環境が整っているため、*hammer* 自体から喚起されるフレームとは別フレームで解釈され、当該発話は認められている。

本稿で扱う道具動詞との関連で言うと、「モノを使用してどのような行為をするのか」という情報自体は実世界の知識である off-stage 情報に属するが、この off-stage 情報は特定の文脈下で特定の視点から事態を詳述する必要がある際に言語化される。そのため、聞き手はこのような文脈を手掛かりに親名詞が参与するフレームを決定することができると言える。

3.2. 日英語における私的自己・公的自己中心性の違い

ここまで紹介したフレーム意味論は、ある言語の語彙や構文がどのように人の経験や世界知識を言語化し、どのような形式で意味表出しようのかを記述する理論であるが、2 節で見た通り ((14a) 参照)、日英語道具動詞形成にともなう生産性の差異を説明するには語用論的情報、すなわち「ある場面に対してモノをどのように使用するか」という対事的情報 (off-stage 情報) が各言語間でどのように言語化

されるのかを考える必要がある。この目的のため、本稿では Hirose (2000 他) が提案する「私的自己・公的自己」という語用論的類型論の概念を導入する⁸。

Hirose は話し手を「私的自己」と「公的自己」という2つの側面に解体する。私的自己とは聞き手の存在から独立した思考や認識の主体であり、公的自己とは聞き手の存在を前提とした伝達の主体である。これら私的自己と公的自己のいずれに重心を置くのかという、基本的な自己中心性（無標の直示的中心の位置づけ）において日本語と英語は異なり、それに伴って意味的・語用論的に示す文法的振る舞いが言語間で異なると考える。日本語は思考の主体である私的自己を無標の中心とする言語であり、話し手の認識や思考を表出した「私的表現」を無標の表現レベルとする。一方、英語は伝達の主体である公的自己を無標の中心とする言語であり、話し手の認識や思考を聞き手に伝達する「公的表現」を無標の表現レベルとする。私的表現と公的表現の定義（廣瀬 1997: 6）は以下の通りである。

- (19) a. 伝達を目的としない、個人的営みとしての思考表現行為を「私的表現行為」と呼び、私的表現行為で用いられる言語表現を「私的表現」と呼ぶ。
 b. 伝達を目的とした、社会的営みとしての思考表現行為を「公的表現行為」と呼び、公的表現行為で用いられる言語表現を「公的表現」と呼ぶ。

この「私的自己・公的自己」の二分法による帰結のひとつとして、単なる平叙文の使用でも情報の伝達性が日英語で異なるということがあげられる。

- (20) a. 今日は金曜日だ。
 b. 今日は金曜日 {だよ/です/でございます}。
 c. Today is Friday.

（廣瀬 2017: 13–14）

日本語においては、(20b) のように終助詞や丁寧体といった、聞き手の存在を意識した表現を用いない限り、基本的に話し手の思いをただ言語化しただけの文になってしまうため、(20a) の文は、例えば、話し手がわざとぶっきらぼうな態度をとっているといった特殊な文脈でない限り、公的表現としては不自然である。一方の英語では、聞き手への伝達性がデフォルトで保証されているため、(20c) のような無標の平叙文であっても話者の認識を表すだけでなく、そのままの形で聞き手に伝達することができる。つまり、私的自己中心の日本語では、話し手の認識や思考を聞き手に伝える際、相手との関係を考慮してしかるべき伝達性を持たせなければ、公的表現にはなりえないのに対して、公的自己中心の英語では、話し手の思考や認識には常に聞き手の存在を意識した公的自己の視点が介在するため、「話し手と聞き手の双方向的関係に基づく情報の共有に重き」（廣瀬 2017: 18）を置くと言える。

⁸ 日英語の道具動詞形成の分析にあたり、「フレーム意味論」と「私的自己・公的自己論」の両理論間の関係性についてご指摘いただいた査読者に感謝申し上げます。

4. 提案

4.1. 日英語においてなぜ道具動詞形成の生産性に差が出るのか

3.1節で述べた通り、「モノ」の用途には必ず「場面」(フレーム)との関係づけが必要であり、道具動詞には「モノをどのように使用するのか」という実世界の知識(off-stage情報)が換喩的に符号化されていることを踏まえると、フレーム意味論の観点からは、道具動詞は以下のように定義することができる。

- (21) モノが使用される特定の場面と関係づけられた結果、その場面の中でそのモノが顕著に果たす役割をそのモノの名前で符号化した動詞

特定の「場面」内で「モノ」がどのように関係づけられている(用いられている)のかという状況を私的自己が把握する際には、単なる客観的な状況の把握であるため、言語の違いは存在しない。例えば、レンガを壁作りに使用したり、ドアストッパーに使用したりする実世界の状況は、日本語の話し手にとっても英語の話し手にとっても同様に把握される。言語的に違いが表れるのは、そのモノと場面の関係づけという話し手の思考・認識レベルを聞き手に伝達する際の符号化においてである。つまり、英語の話し手は、ある場面において顕著な役割を果たす道具要素を、客観的な場面の参与者として言語化するだけで十分であるのに対し、日本語の話し手は、当該場面において道具要素がどのように使用されるかという、話し手による場面とモノの関係づけを示したoff-stage情報までも言語化する必要があるという符号化の違いから両言語間で道具動詞形成の生産性差異が生じていると主張する⁹。

私的自己中心の言語である日本語の場合、聞き手との関係性を考慮して発話しなければ、しかるべき伝達性を帯びない。つまり、話し手が一方的にモノと場面を関係づけただけの私的表現は聞き手への配慮に欠けるため、そのような発話は語用論的に認められない。したがって、基本的に日本語においては、例えば(22)(= (4))のように、そのモノを使ってどのような行為をするのかまで明示しなければならない。

- (22) ナイフで切る、鉛筆で書く、鍋で煮る、針で縫う、金槌で叩く、自転車で移動する、電子レンジで温める、フォークで刺す、バターを塗る、ゼロックスでコピーする

一方、公的自己中心の言語である英語の場合、話し手の思考・認識レベルでも聞き手を意識した「公的自己」の視点が入り込むため、聞き手は話し手がどのようにモノと場面を関係づけているのかを話し手と同じ側から想起することができる。そのため、(22)のようにそのモノを用いてどのような行為を行ったかを明示せずとも、

⁹ 紙面の都合上詳細に立ち入ることはできないが、「私的自己・公的自己」の二分法の観点から、話し手がどのように状況を捉えているのかという対事的態度が日英語においてどのように言語化されるのかを扱った論考は、本稿以外にも例えば金谷(2022)などがある。

親名詞が喚起するフレームの off-stage 情報までアクセスすることができる。このような観点から、次節はそれぞれの言語で特有の道具動詞形成メカニズムに説明を与えることでその妥当性を検証する。

4.2. 英語における関係性の逆転：場面の利用

話し手がどのようにモノと場面を関係づけているのかを、話し手と同じ側からデフォルトで想起できるのが英語であるという主張のサポートとして、ここでは、完全に場面に依存したモノの用途が、そのまま符号化されている事例の分析を提示する。

- (23) a. He keyed the door open and went in.
 b. In January, someone keyed her car and her husband's truck.

(Michaelis and Hsiao 2021: 7, 下線追加)

(23a, b) では同じ親名詞 *key* が道具動詞として使用されているが、(23a) では「かぎで開けた」という意味で、(23b) では「かぎでひっかいた」という意味で使用されている。FrameNet (<http://framenet.icsi.berkeley.edu/>) によると、語彙項目 *key* からは (24) に定義されるような《Key フレーム》が喚起される。

- (24) This frame is for objects, physical or otherwise, which are used to grant access to some location or function.

つまり、「鍵 (<Key>) を使ってある場所 (<Location>) や機能 (<Function>) にアクセスする」というフレームであり、(23a) の目的語 *the door* はこのフレームの一要素として「アクセスする場所 (<Location>) の入り口」として解釈されている。一方、このフレーム内のフレーム要素では、(23b) の目的語を「ひっかかれる対象」とさせるようなフレーム要素は存在しない。Michaelis and Hsiao (2021: 7-8) はこの問題に対し、概念融合 (Conceptual Blending (Fauconnier and Turner 2002)) に基づき、《Key フレーム》と (25) のように定義される《Damaging フレーム》(FrameNet 参照) が融合した結果、目的語である *her car and her husband's truck* が「引っ搔かれる対象」として解釈されていると提案している。

- (25) An <Agent> affects a <Patient> in such a way that the <Patient> (or some <Subregion> of the <Patient>) ends up in a non-canonical state. Often this non-canonical state is undesirable, and some lexical units (marked with the Negative semantic type) specifically indicate that the <Patient> is negatively affected.

しかし、Michaelis and Hsiao の提案では、親名詞 *key* から喚起される《Key フレーム》からどのような要素が継承されているかについては不明確であり、(23b) の解釈はほとんど《Damaging フレーム》に沿ってなされているように思われる。そこで本稿では、(23b) の解釈には概念融合や《Key フレーム》は関わっているとは考

えず、当該発話がなされる文脈において、「モノを使ってどのような行為をするのか」という off-stage 情報を具現する必要性があったため、結果的に《Damaging フレーム》が想起されたと主張する。以下は (23b) の前後文脈を追加したものである。

- (26) [...] The paint covered part of her windshield, roof, and the back of her truck. She says a can of paint was left sitting behind a tire. “They just left it,” said Mixon-Penn. She was able to wash it off, but she wasn’t so lucky when it happened the first time in April. Her driveway is still covered in gray paint after someone poured it on another one of her cars. In January, someone keyed her car and her husband’s truck. “Where am I supposed to park my car if my car isn’t safe in my own driveway?” she asked. [...] (<https://myfox8.com/news/homeowner-in-winston-salem-a-victim-of-vandalism-multiple-times/>, 下線追加)

この文脈から分かることは、ペンキで車を汚されるという汚損行為の被害が已にあったことである。つまり、汚損行為の手段は様々考えられる中で、「今度は他（ペンキ）でもなく鍵で車を傷つけてきた」というニュアンスで当該発話は使用されている。これは、「汚損行為がなされている」という場面において、話し手の中でその行為の手段として「鍵」が使用されたことが際立ったためであり、この点で、(21)の道具動詞の符号化の定義と一致している。「鍵を使ってどのような行為をするのか」という言語外の知識は off-stage 情報にあたるが、「傷をつける」という行為は親名詞 key からは喚起できず、(26) のような場面が設定されて初めて解釈できる行為である。このような、いわば「場面全体」を想起させるような道具動詞の符号化の仕方は、どのようにモノと場面を関係づけているかを話し手と同じ視点に立って聞き手が想起することができる英語に特有の道具動詞形成メカニズムだと言えるとともに、3.1 節で言及した、文脈上の背景情報が当該発話が喚起するフレームを決定する上で重要な役割を果たす ((18) 参照) とする Boas (2011) の主張を支持する事例でもある。

4.3. 日本語道具動詞の位置づけ

4.1 節の主張を踏まえると、日本語において道具動詞が認められないのは文法レベルではなく、語用論のレベルである。例えば、[*ナイフする] は文法的には「する」との複合化により形成可能な道具動詞であると考えられる。しかし、私的自己中心の言語である日本語では、話し手がどのように「モノ」と「場面」を関係づけているのか、そのモノでどのような行為をするのか (例: ナイフで {切る/刺す/襲う}) ということまで明示しなければ、話し手の思考をただ表現した「私的表現」、つまり、聞き手への配慮が欠けた表現となり、語用論的に不適切だということになる。この主張は、日本語の道具動詞形成を体系的に認められない語形成だとする長谷部・神谷 (2022) の立場と相反するが、2.3 節で観察した例外的事例に対しても (i) どのような場合に認められるのか、(ii) なぜ聞き手に対して碎けた印象を与えるのかと

いう点を原理的に説明することができるため、妥当であると言える。

まず、(i) について、日本語において例外的に道具動詞が認められる場合は2パターンあると提案する。1パターン目は、特殊な社会文化的背景知識を共有する話し手と聞き手の間でのみ使用される隠語 (“secret language” (Tsuji-mura and Davis 2018: 379)) として機能するもので、この場合、聞き手への配慮が欠けているわけではなく (つまり「公的表現」として機能しているが)、話し手と聞き手の特定のな関係を利用したレジスター特化型 (“register-specific” (Akita 2014)) の語形成のひとつとして位置づけられる。2パターン目は、話し手が聞き手との心理的距離を縮めるために、意図的に「私的表現」のまま発話する場合であり (Hasegawa 2010, Naya 2017, Kanetani 2022b 参照)、この時 (ii) の効果が伴うと主張する。

1パターン目については、以下のような事例が当てはまる。

- (27) a. 薩摩芋を木取り、薄く包丁し流水に晒す。 (= (11a))
 b. 基板のはんだごてより難しくて、はんだする際、ワニ口クリップが動きはんだしにくいです。(https://kidsdreamclub.net/blog-16/, 下線追加)
 c. [...] BE の疑いのために生検を鉗子する患者、または [...] (https://ichgcp.net/ja/clinical-trials-registry/NCT04312633, 下線追加)
 d. 「俺がトンボしとくから、ボールの片付けしといて。」

このパターンは発見すること自体は難しいが、当該の道具を日常的に使用するような界限では、生産的に使用される道具動詞であると考えられる。例えば、(27b) は金属などを接合する際に使用される「はんだ¹⁰」が、(27c) は医療器具の一種である「鉗子」が、(27d) は土のコートを整備するための道具である「トンボ」が、それぞれ道具動詞になった事例であるが、一般的には発話されない動詞である。また意味についても、例えば、(27a) は日本料理の職人が調理手順を説明しているものであるが、単に「包丁で切る」ことを意味するわけではなく、「職人としての技術を行使して食べ物を切る」というような特殊なニュアンスが伴う。そのため、喚起されるフレームはかなり特定のなものだと考えられ、同定することは難しいが、むしろこのような発話の場面では、例えば、「包丁で切る」という迂言的な表現よりも、よりの確な言葉の選択だと言える。つまり、(少なくとも同じ界限の) 聞き手との関係性を考慮して発話しなければならない日本語では、(27) のように動詞一語で話し手の社会的役割を合図できる表現の方が好まれるのである。

2パターン目は、上述の特定の仲間内だけで使用される業界用語 ((in-group) jargon) 的な道具動詞ではなく、話し手が一方的にモノと場面を関係づけた「私的表現」としての用法である。以下が正にその事例に該当する。

- (28) a. 「そうへいくんまだボールする!」

¹⁰「はんだ (半田)」は金属などの接合を意味する事象名詞だという可能性もあるが、その解釈は「はんだ付け」からくるものであり、元々は錫と鉛の合金を指す。

- b. 「今日は、ボールしなかったね。」って言うてくれるお友達もいて、3歳児さんも前回のレッスンの事をしっかり覚えてくれていました。
(= (13))
- (29) a. * |ピアノ／ギター| する。
b. でもここ数日はピアノしてないから、またブランク埋めからやり直しだな…辛い…。(https://fantasystudy.com/diary/20210215/, 下線追加)
c. 「今日はまだギターしてない！早くやりたい！」という気持ちになるはずです。(https://ackne.site/guitar-fast-practice/, 下線追加)

(13) からの再掲である(28)は特に幼児に見られる発話であり、特殊な文脈がない限り大人が「ボールする」とは言わないであろう。話し手の思いを単に表出した表現であるとする証拠に、実際にどのような意味で使用しているかは、当事者でない限り文脈から推測するしかなく、ボールと当該の場面との関係づけはかなり主観的である。また、(29a)は「|ピアノ／ギター|を弾く」という意味で当該道具動詞は認められないことを示すが、(29b, c)のように、話者の思いを単に述べたような心的発話形式の文体で発見することが出来る(例えば「やり直しだよ…辛いよ…」や「ギターしてないよ」のように「～よ」などの聞き手の存在を前提とした呼びかけの表現が欠如している(廣瀬 1997: 7 参照))。

このような発話聞き手を想定した中で行われると、「いわば裸で人前に入る」(廣瀬 2017: 14) ことになるため、語用論的に不適切な発話となってしまうが、これが「ホッチキスする」に伴う、聞き手に対して砕けた印象を与える効果の正体である。(30)は(12a)の再掲であるが、学生が教員に向けて発話するという比較的フォーマルな場面設定であった。

- (30) (?) 「今日のレジユメはホッチキスしてあります。」 (= (12a))

インフォーマント調査では近い間柄の教員に対してであれば(30)は認められるという判断を得たが、この事実とも合致する。つまり、あえて「私的表現」のまま表出させることで、「あなたとそれだけ近い仲ですよ」ということを言語的に合図した発話だと理解できる。聞き手がいる中でこのように私的表現を織り交ぜて発話することで、聞き手に対して親しさを表現するという語用論的戦略は先行研究においても見られ、例えば、Hasegawa (2010: Ch.5) は独り言が会話に挿入される現象(例: 「へえー、先生でもそうなんだあ」(Hasegawa 2010: 158))を会話モードから独り言モードへのメタ語用論的シフト(“metapragmatic shift”)と考え、聞き手との心的距離を話し手が縮めたい際にこの戦略が使用されると分析している¹¹。(31)はこの私的表現としての道具動詞の語用論的戦略を利用した事例だと考えられる。

¹¹ 近年出現した because の新用法(例: *because homework/sick*)を分析した Kanetani (2022b) や、丁寧表現「ください」のオンラインコミュニケーション上での新規用法(例: 添削しろください)を扱った Naya (2017) でも同様の趣旨の提案がなされている。

- (31) カニクリームコロッケの上にマヨネーズはかけないで！マヨネーズの味しかしない。なんで客の承諾も無しにマヨするの？ (<https://tabelog.com/tokyo/A1317/A131706/13001439/dtrvwlst/B198432503/>, 下線追加)

(31) はある飲食店で食事をした客が、その店のある料理についてネットで書き込んだレビューである。内容としては、店側に対して出された料理の批判をしているものであり、いわば店側に対するフェイス侵害行為 (Brown and Levinson 1987) と言える。一方、レビューを「マヨネーズをかけるの？」という迂言的な表現ではなく「マヨするの？」と一語で終えることで、店側が受ける批判の印象を和らげる、いわば侵害したフェイスを修復するためのポライトネスストラテジーとして機能していると考えられる。

以上、日本語において道具動詞形成が認められるのはレジスター特化型のもの、聞き手との親密度をあげるためにあえて私的表現のまま発話するものの2パターンあることを見てきたが、両者の関係性について述べておく。本稿の想定では、レジスターに特化した仲間内の表現を使うことで、親密度や一体感が同時に上がる (Brown and Levinson 1987: 107–111 参照) ということは考えられるため、両者は全く別々の語形成ではなく連続体を成していると考えられる。例えば (27d) を例にとると、チームメイトと会話をしている際に「トンボしとくよ」と言うのではなく、迂言的に「トンボで [整備／なら] しとくよ」と言うのと、例えば特別グラウンドが荒れていて整備が必要であるといった特殊な文脈がない限り、他人行儀でよそよそしい言い回しになる。このようにレジスター特化型の道具動詞の使用には相手との親密度を上げる効果が随意的に伴うので、両者は表裏一体の関係にあると言える。

5. 日英語における道具動詞形成レベルの違い：語レベルと句レベル

4節では、日英語における私的自己・公的自己中心性の違いという観点から、場面全体を想起させるような道具動詞の符号化が可能なのが英語であり、それができず話し手・聞き手の特定の関係 (フレーム) に依存するような、業界用語的道具動詞において認められるのが日本語であるという主張を行ってきた。この符号化の違いは、つまり、英語の道具動詞形成は述部と項との関係性で成立する句レベル (“nucleus level” (Dirven 1999: 277)) の現象である一方、日本語は語レベルで成立する現象であると言える。この点を、動詞という範疇ステータスが日英語でどのように示されているのかという観点からさらに考察していく。

英語道具動詞の特徴的な点は、名詞の形が保持されたまま動詞として使用されるところにある。Nagano (2008: Ch.5, 6) によると、転換された動詞は形態統語的環境によって明白な形で動詞という範疇ステータスを保証される必要がある (“category-expression requirement”), そのような統語環境に好んで生起するという。道具動詞もこの例外ではなく、当該動詞群のほとんどは「モノを使用して何かに働きかける」という他動詞の意味で用いられる (例: *mop_V the floor*, *bomb_V the*

village)。乗り物を親名詞とした道具動詞は自動詞として用いられるが、その場合においても必ず (32) のように、指示対象を持たない *it* によって強制的に他動詞の統語環境が用意されたり、(33) のように、動きの経路や方向を表す副詞句や前置詞句が付加されたりすることで、迂言的に親名詞が動詞範疇であることが指定される。

(32) We may cab it ... we may bus it; or we may go by boat. (Nagano 2008: 133)

(33) He climbed on to his Lambretta and scootered off toward Oxford Street.
(ibid.: 141)

一方、日本語道具動詞は軽動詞「する」によって、動詞範疇は形態的に明白な形で示されている。2.1 節でも述べたように、日本語の「する」による複合語の形態上のステータスは、完全なる一語ではないがそれに近い緊密性を持つという点で通常の VP よりも統語的な結びつきが強く、一つの語彙的単位として機能している。Booij (2010: Ch.4) は、このような語とも句ともつかない単位について、[[N][V]]_v という連なりで特異な意味を持った構文を成していると提案し、その認可条件は「名付けの価値がある行為」(“nameworthy activity”), すなわち、何らかの特殊な技能が必要な慣習的行為を表すことであると述べている。この点で、「包丁する」のような特殊なニュアンスが伴う、社会的役割を一語で表した日本語の道具動詞は、正にこの「名付け価値のある行為」を符号化した動詞であると言える。

以上、日英語における道具動詞形成は語レベルと句レベルという別々の現象レベルに起因させることが可能で、それは動詞範疇の明示化方法の違いから支持できることを示した。

6. 結語

本稿では、日本語と英語の道具動詞形成における生産性の差異について、フレーム意味論と私的自己・公的自己論の観点から説明を与えた。道具動詞には「モノを使用してどのような行為をするのか」という対事的な語用論的知識が符号化されており、そのモノの用途には必ず「場面」との関係づけが必要である。このモノと場面の関係づけを把握する際には日本語話者でも英語話者でも違いは生じないが、この関係づけを言語化する際に両言語がもつ私的自己・公的自己中心性の違いから、道具動詞の形成可否に影響が出ていると主張した。すなわち、思考・認識の主体である私的自己を無標の直示中心とする日本語では、話し手はモノと場面をどのように関係づけているのかまで明示しなければならない(例: ナイフで {切る/刺す/襲う}) のに対し、伝達の主体である公的自己を無標の中心とする英語では、話し手の思考・認識レベルでも聞き手の存在が介在するため、日本語のようにモノでどのような行為をするのかまで明示せずとも、モノと場面の関係づけを話し手と同じ視点から聞き手は想起することができると提案した。このように考えることで、日本語において例外的に認められる道具動詞形成について、(i) 聞き手との特定のな

関係性を利用したレジスター特化型の形成パターンと (ii) 聞き手との親密度を上げるために意図的に私的表現のまま表出させる形成パターンの2種類存在することを原理的に予測することができる。

参考文献

- Akita, Kimi (2014) Register-specific morphophonological constructions in Japanese. *Proceedings of the Berkeley Linguistics Society* 38: 3–17.
- Anderson, Stephen R. (1992) *A-morphous morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Baekow, Heike (2006) Reflections on noun-to-verb conversion in English. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 25: 205–237.
- Baekow, Heike (2021) Noun-verb conversion as a metonymic metamorphosis. *SKASE Journal of Theoretical Linguistics* 18(1): 2–34.
- Boas, Hans C. (2003) *A constructional approach to resultatives*. Stanford: CSLI Publications.
- Boas, Hans C. (2011) Coercion and leaking argument structures in Construction Grammar. *Linguistics* 49: 1271–1303.
- Booij, Geert (2010) *Construction morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, Eve V. and Herbert H. Clark (1979) When nouns surface as verbs. *Language* 55: 767–811.
- Dirven, René (1999) Conversion as a conceptual metonymy of event schemata. In: Klaus-Uwe Panther and Günter Radden (eds.) *Metonymy in language and thought*, 275–287. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Fauconnier, Gilles and Mark Turner (2002) *The way we think: Conceptual blending and the mind's hidden complexities*. New York: Basic Books.
- Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In: The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the morning calm*, 111–137. Hanshin: Seoul.
- Fillmore, Charles J. and Collin F. Baker (2010) A frames approach to semantic analysis. In: Bernd Heine and Heiko Narrog (eds.) *The Oxford handbook of linguistic analysis*, 313–340. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles J., Christopher R. Johnson, and Miriam R.L. Petruck (2003) Background to FrameNet. *International Journal of Lexicography* 16: 235–250.
- 藤井聖子・小原京子 (2003) 「フレーム意味論とフレームネット」『英語青年』149(6): 373–376, 378.
- 藤井聖子・内田諭 (2023) 『フレーム意味論とフレームネット』東京：研究社。
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- 長谷部郁子・神谷昇 (2022) 「日英語の道具名詞の動詞化について」『外国語教育論集』44: 51–60. 筑波大学。
- Hasegawa, Yoko (2010) *Soliloquy in Japanese and English*. Amsterdam: John Benjamins.
- 廣瀬幸生 (1997) 「人を表すことばと照応」中右実 (編) 『指示と照応と否定』1–89. 東京：研究社。
- Hirose, Yukio (2000) Public and private self as two aspects of the speaker: A contrastive study of Japanese and English. *Journal of Pragmatics* 32: 1623–1656.
- 廣瀬幸生 (2017) 「自分の言語学一言語使用の三層モデルに向けて—」廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子 (編) 『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』2–24. 東京：開拓社。
- Keyama, Taro (1977) Incorporation and Sino-Japanese verbs. *Papers in Japanese Linguistics* 5: 117–156.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京：ひつじ書房。
- Keyama, Taro (1999) Word formation. In: Natsuko Tsujimura (ed.) *The handbook of Japanese linguistics*, 297–325. Oxford: Blackwell.

- 影山太郎 (2005) 「辞書の知識と語用論の知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合に向けて—」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.1』 65–101. 東京：ひつじ書房。
- 金谷優 (2022) 「何を言い、何を言わないか—日英語の言いさし文と三層モデル—」廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・長野明子 (編) 『比較・対照言語研究の新たな展開—三層モデルによる広がりど深まり—』 83–115. 東京：開拓社。
- Kanetani, Masaru (2022a) On the relation between richness of ideophones and private-self-centeredness: A comparison of Japanese and English. *Tsukuba English Studies* 40: 267–287.
- Kanetani, Masaru (2022b) A grammatico-pragmatic analysis of the *because* X construction: Private expression within public expression [version 2; peer review: 2 approved]. *F1000Research* 10: 965. <https://doi.org/10.12688/f1000research.72971.2> [accessed August 2023].
- Kiparsky, Paul (1997) Remarks on denominal verbs. In: Alex Alsina, Joan Bresnan, and Peter Sells (eds.) *Complex predicates*, 473–499. Stanford: CSLI Publications.
- Matsumoto, Yo (1996) *Complex predicates in Japanese: A syntactic and semantic study of the notion 'word'*. Stanford: CSLI Publications.
- Michaelis, Laura A. and Allen Minchun Hsiao (2021) Verbing and linguistic innovation. *Frontiers in communication* 6: 127. <https://doi.org/10.3389/fcomm.2021.604763> [accessed August 2023].
- Miyagawa, Shigeru (1987) Lexical categories in Japanese. *Lingua* 73: 29–51.
- Nagano, Akiko (2008) *Conversion and back-formation in English: Toward a theory of morpheme-based morphology*. Tokyo: Kaitakusha.
- Nakajima, Hirotsuka (2020) Encyclopedic knowledge in denominal verbs in English: A case study of body-part verbs. 松本曜教授還暦記念論文集刊行会 (編) 『認知言語学の羽ばたき—実証性の高い言語研究を目指して—』 99–115. 東京：開拓社。
- 中嶋浩貴 (2022) 「英語における語形成へのフレーム意味論的アプローチ—植物名詞に由来する名詞転換動詞の研究—」松本曜・小原京子 (編) 『フレーム意味論の貢献—動詞とその周辺—』 213–227. 東京：開拓社。
- Naya, Ryohei (2017) An innovative use of *kudasai* in Social Networking Services. *Annals of "Dimitrie Cantemir" Christian University: Linguistics, Literature and Methodology of Teaching* XVII(1): 62–78.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』東京：くろしお出版。
- Pustejovsky, James (1995) *The generative lexicon*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Pustejovsky, James (2003) Categories, types, and qualia selection. In: Anna Maria Di Sciullo (ed.) *Asymmetry in grammar: Volume 1: Syntax and semantics*, 373–393. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Rosch, Eleanor H. (1973) Natural categories. *Cognitive Psychology* 4: 328–350.
- Tsujimura, Natsuko and Stuart Davis (2011) A construction approach to innovative verbs in Japanese. *Cognitive Linguistics* 22: 797–823.
- Tsujimura, Natsuko and Stuart Davis (2018) Japanese word formation in construction morphology. In: Geert Booij (ed.) *The construction of words: Advances in construction morphology*, 373–398. Cham, Switzerland: Springer.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』東京：ひつじ書房。
- 由本陽子・影山太郎 (2011) 「名詞が動詞に変わるとき」影山太郎 (編) 『日英対照：名詞の意味と構文』 178–208. 東京：大修館書店。

執筆者連絡先：

[受領日 2023年9月2日

筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院 最終原稿受理日 2024年4月5日]

e-mail: s2230011@u.tsukuba.ac.jp

Abstract

**Formation of Instrument Verbs in Japanese and English:
From the Perspectives of Frame Semantics and Basic Egocentricity**

YUKI OKADA

University of Tsukuba

Instrument verb formation is very productive in English (e.g., *knife_v the man*), whereas it is restricted in some way in Japanese (e.g., **naihu-(su)ru* ‘to knife’). From the perspective of Frame Semantics (Fillmore 1982, among others), this study observes that central to the formation of instrument verbs is to associate a certain scene with a thing named by a parent noun (i.e., a noun to be converted into a verb), arguing that this difference in productivity between English and Japanese reflects their unique manner of linguistic encoding which is motivated by their basic egocentricity (Hirose 2000). More precisely, in Japanese as a private-self-centered language, encoders must overtly encode how the parent-noun participant is associated with (or used in) a scene (e.g., *naihu-de-kiru/sasu/osô* ‘to cut/stab/attack with a knife’), which corresponds to the “off-stage” (Boas 2003) information with respect to the scene. By contrast, in English as a public-self-centered language, decoders can view the associated scene on a par with the encoder and thus activate off-stage information as to how and for what purpose the parent-noun participant is used within the scene, even without overt linguistic encoding of the relevant information. As a result, Japanese “exceptional” instrument verbs (e.g., *hōtyō-suru*, *hottikisu-suru*), even if occurring seemingly at random, are classified in a principled way as follows: (i) register-specific instrument verbs that presuppose who is talking to whom and (ii) what Hirose (inter alia 2000) calls “private expressions” that may be employed as a strategy to express intimacy to the addressee.